

## 『恋する女たち』における男同士の愛

田島, 健太郎  
九州大学大学院 : 博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/1909544>

---

出版情報 : 九大英文学. 59, 2017-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『恋する女たち』における男同士の愛<sup>1</sup>

田島健太郎

## はじめに

本稿では、D. H. ロレンスにより執筆され、1920年に発表された長編小説『恋する女たち』(Women in Love)における、ルパート・バーキンとジェラルド・クライチの一見奇妙な男同士の絆に着目し、その意味を考察する。『恋する女たち』は、二組の異性愛カップルの関係性を対比することによって理想の性愛のあり方を模索し、生の「充足」を「創造的神秘」(479)との連関に求める作品である。ところが本作には、以上述べたような本筋とは相容れない、男性同士の親密な絆が織り込まれている。

この男同士の愛に焦点を当てた研究のうち多くが、作品中盤においてバーキンとジェラルドが裸で柔術らしき格闘を行う場面に注目し、同性愛的な解釈を試みる。<sup>2</sup>これに対し西田稔は、純粋な友愛を求めるバーキンの提案を、卑俗な性愛への嫌悪に裏付けられた自と他の純粋な結びつきと解釈している(194)。しかしこの解釈は、ロレンスがことさらに強調している肉体的な要素の重要性を、切り捨ててしまっているように見受けられる。ただ男同士の友愛を描写しているのだとすれば、何故ホモセクシュアルとも解されかねない

---

<sup>1</sup> 本稿は日本英文学会九州支部第59回大会(2016年10月26日、於中村学園大学)での研究発表原稿に、加筆・修正を加えたものである。発表は『『恋する女たち』における同性間の絆』の題目で行った。

<sup>2</sup> 先行研究の多くは、『恋する女たち』以外の文献に根拠を求めている。例えばJ. M. Murryは、ロレンス自身が夫婦関係について内面的な葛藤を抱えていたという伝記的事実を、本作に当てはめて解釈している。Christopher Craftは作者の論文「王冠」の一部を援用する。「王冠」は『恋する女たち』に先立って1914年12月以降に執筆され、現代における腐敗、破壊の意義を説く。またJoyce Carol Oatesは作者自身が削除した「プロローグ」などに根拠を求めている。「プロローグ」ではバーキンとジェラルドの出会い、バーキンが女性を愛することができないことなどが語られる。

ほどの、生々しい肉体的接触の描写が必要なのか、という疑問が依然として残るのである。

そこで本稿は、西田のようにバーキンとジェラルドの関係性を一義的には「友愛」と位置づける一方、この「男同士の愛」が、男女の恋愛関係における官能的な体験と同様に、身体的なコミュニケーションを必要とした点に着目する。『恋する女たち』は二つの異性愛のあり方を比較していることを上で述べたが、実のところジェラルドとバーキンの関係性においても、二人の関係をより完全なものに昇華するための条件は、異性愛におけるそれと同じなのである。そこから、この同性間の絆が「第三の対比項」になり得る、という解釈が浮かび上がってくる。本稿はまずバーキンとジェラルドの人物像を整理しつつ、作品に通底する思想を確認する。これを踏まえて二組のカップルの関係性を比較し、他者の神秘性と、「個」の尊厳を守ることの重要性が示唆されていることを論じる。最後に、ジェラルドとバーキンの格闘シーンの意義を、身体的コミュニケーションの観点から見つめなおす。言語や観念といった「精神的な知」の不完全性をひとつの主題とする『恋する女たち』の理論においては、男同士の友愛であっても身体的な交流が必要になってくるのである。

## 1. バーキンの思想

『恋する女たち』の「まえがき」において、ロレンスは彼と同時代の人々が闘わなければならない、新生への葛藤について次のように述べている。

We are now in a period of crisis. Every man who is acutely alive is acutely wrestling with his own soul. The people that can bring forth the new passion, the new idea, this people will endure. Those others, that fix themselves in the old idea, will perish with the new life strangled unborn within them. (486)

「古い観念」に固執する者が新たな生に目覚めることなく息絶える一方で、「新たな情念、観念」を生み出す者は生き残るというロレンスの予言は、本作の結末を端的に予示している。物語の基本的な構造は、作者の代弁者とされるバーキンが「愛」や「生の充足」といった主題について長広舌を振るい、それを具現するかのような彼とアーシュラの関係性に対比して、ジェラルドとグドルーンが相互破壊的で不幸な関係性に陥っていく過程が描かれる、と

いうものである。因習的な生の様式に屈従したが故に、空虚な生からの脱出を果たすことができなかつたジェラルドは、「恐ろしい静止」の空間、不毛にして不変の雪原に、硬直した死体を晒すことになる(434)。

ジェラルド・クライチは内面に非人間的・機械的なまでの意志力を有する人物であり、その破壊性は 19 世紀以降のイギリスで見られた急速な工業化現象と結びつけられる。彼は炭鉱業を営む父の跡を継ぐと、炭鉱の機械化と効率化によって個々の労働者を産業構造の歯車へと還元してゆく「機械の神」と化す(223)。彼はロレンスが前作『虹』から一貫して批判する、全体主義的な工業化の権化であり、内面に本質的・致命的な「虚無」を抱えた人物である。この「虚無」は「死」と密接に結びつく。彼の家族は多くが悲惨な死を遂げるか、空虚な人生を送っており、それらの死は注意深く工業化・近代化の文脈に絡めて描かれるからだ。このような「死」と連動する「虚無」を恐れるジェラルドは、常にその空白を埋めてくれる補完物を求めるのである。彼はしばしば人生を充実させるための指針をバーキンに訊ね、バーキンは「ひとりの女性との永久的な結合」が唯一の「生を中心」とであると答える(58)。こうした中でジェラルドが見出した女性が、アーシュラの妹であり、芸術家でもあるグドルーンであった。グドルーンは豊かな才能を秘めながらも、男社会の中で自己実現の方法を図りかねている女性として描かれる。互いに互いを支配しようと葛藤する中で、二人はやがて共依存的な関係に陥るが、グドルーンがアルプ스에서彼から独立した自己実現のビジョンを見出してしまったことにより、二人の関係は破綻を迎える。生の方向性を見失ったジェラルドは、雪山を彷徨ううちに凍死する。内面の虚無(=比喩的な死)に蝕まれていたジェラルドは、不毛の空間であるアルプスにおいて実際の死と一体化するのである。

バーキンはある種の終末思想を信奉しており、その哲学は現代の英国社会(あるいはヨーロッパ文明)に対する強い失望から出発する。“Humanity is a dead letter.... Let humanity disappear as quick as possible”と断言するバーキンは、人類が自然の創造的神秘との連関を断たれ、人間の生の営みにもはや有機的な意義や価値が見出せなくなったことを悟っており、突き放したような諦観を露わにする(59)。この終末思想的な観念は、次のような「崩壊の黒い河」の形をとっていく。

...[T]hat dark river of dissolution. You see it rolls in us just as the other rolls— the black river of corruption. And our flowers are of this— our sea-born Aphrodite, all our white phosphorescent flowers of sensuous perfection, all our reality, nowadays....

...When the stream of synthetic creation lapses, we find ourselves part of the inverse process, the blood of destructive creation. Aphrodite is born in the first spasm of universal dissolution— then the snakes and swans and lotus— marsh-flowers— and Gudrun and Gerald— born in the process of destructive creation. (172)

人々がいつも思いを馳せる「白銀の生命の河」とは対照的に、今や人類の現実には「人工的創造」の過程がその極致に至った後に訪れる逆流である「黒い崩壊の河」に飲み込まれている。グドルーンとジェラルドを含む現代人は一人残らず、この「黒い崩壊の河」の申し子である。この崩壊の流れが世の終末に行き着くと新たな創造が始まるが、その新しい世界にもはや人類は存在しない(“It means a new cycle of creation after— but not for us” [173])。

このような非人間的な次元への憧れ、人間性の超越といったテーマは『虹』から引き続き、本作において中心的な位置を占めている。バーキンの信じる場所では、神や信仰といったスピリチュアルなものが価値を失った現代において、人間は墮落の途を辿る一方である。その「腐敗」と「崩壊」の流れは人類を“universal nothing”の状態に還元するまで止まらず、再生の前には完全な崩壊が必要である(173)。そうした中で個々の人間は、忘我の域に達するような肉体的／官能的／衝動的な体験をすることによって、卑小で世俗的な観念や自意識にまみれたエゴを脱却し、個人として自由になることができる。ただし、真に充実した生を送るためには、さらに自由な魂同士の「永久的な結合」が不可欠であり、しかもこの結合は従来の性愛のあり方では果たされない。

バーキンの思想は「愛」という、一般には極めて人間的と考えられる営みにおいてこそ、人間性の超越を希求する。作品の前半において独自の恋愛観を展開する際、彼はしばしば love や sex 自体に対する嫌悪を露わにするが、それは実のところ女性一般の貪欲な自己主張に対する、男性側の根源的な恐怖の裏返しである。バーキンの女性嫌悪は、女性の愛情がしばしば母性的な所有欲に陥り、その抱擁の中で男性の「個」が消滅してしまうという恐怖に

基づいている。

On the whole, [Birkin] hated sex, it was such a limitation. It was sex that turned a man into a broken half of a couple, the woman into the other broken half. And he wanted to be single in himself, the woman single in her self... [H]e wanted a further conjunction, where man had being and woman had being, two pure beings, each constituting the freedom of the other, balancing each other like two poles of one force.... (199)

「それぞれが互いの自由を構成する」とあるように、一般的に言われる己の全てを投げ打つ類の「愛」とは、彼にとってはあまりにも所有的で俗悪な観念である。この嫌悪感『恋する女たち』においては、制度としての結婚に対する批判に直結する。パーキンにとって、夫婦がその子供たちとともに家庭生活の中に安住する図は「忌まわしい」ものであり、「恐ろしい束縛」に過ぎない(199)。<sup>3</sup>

人間性を超越し、真に理想的な永遠の絆を得るためには、逆説的ながら人間は「個」の尊厳を棄ててはならない。因習的なエゴを放棄しつつも、本質的な「個」の自由は保たねばならないという、この複雑な理想は、パーキンがアーシュラに提示する次のような哲学に通じている——“What I want is a strange conjunction with you...not meeting and mingling...but an equilibrium, a pure balance of two single beings:—as the stars balance each other” (148)。二つの存在が互いの個の尊厳と自由を守りつつも、永久的に結合する。パーキンはこのような「星の均衡」を保った、理想の関係性を思い描きながら、彼と共にこの崩壊の過程を脱却し、「楽園への入り口」(254)を開いてくれる女性、アーシ

---

<sup>3</sup> 作中には、このような結婚観を裏付ける夫婦が数多く登場する。「激情と欲望と抑圧と伝統と、機械的な観念の.....ほとんどでたらめな寄せ集め」であるウィリアムは物質的・機械的な出産と子育てのイベントを繰り返す結婚生活の中で、このような“unresolved”で“uncreated”な存在に成り果てている(255)。またジェラルドの父母であるクライチ夫妻も、夫に抑圧された妻の憤懣が双方の内面を蝕んでいる。ジェラルドがロンドンで肉体関係を持つプッサムは、ハリデイやジェラルドを都合よく操るために、自身の蠱惑的な性と生殖能力を巧みに利用していた。第26章「椅子」に登場する若い妊婦も、同様に赤ん坊の父親を支配下に置いている。これらの男女関係が非創造的とされ、しばしば退廃や破壊に結びつけられるのは、家庭や伴侶、あるいは出産育児の営みへの隷属のうちに個が抹殺されてしまうためである。

ユラとの交流を深めていくことになる。

## 2. 神秘的な他者との合一——バーキンとアーシュラ

『恋する女たち』の前編に当たる『虹』において、「他者」や「未知のもの」といった観念は理想の異性像を特徴づける上で重要であった。『恋する女たち』においても、ジェラルドの妹の結婚式で美貌の裏に危うさを潜ませたジェラルドの姿を初めて目にしたグドルーンは、「世界で他の誰にも知られていない、ある信じがたい発見をしたかのように、強烈な痙攣、恍惚」に打たれる(15)。芸術家としての鋭敏な観察眼と特異な感性を持ち、道行く人々を「客観的な好奇心」を以て一歩引いたところから俯瞰しては“a finished creation”として片づけるのが常であるグドルーンが(14)、これほどの「鋭い接種」のような衝撃を受けるのは(16)、ジェラルドに対してのみである。また視学官としてアーシュラの教室にやってきたバーキンも、彼を見つめるアーシュラの目には奇妙な「静けさ」を放つ「もう一人の、凝集された世界を動く」、「物質的な空気の中の、一点の空白」ででもあるかのように映る(36)。このような不可思議なイメージで以て性愛の対象を理解する『恋する女たち』の男女は、しばしば対象の“strange”な感じに不快感や反発を催しながらも、それゆえに却って強く相手に惹かれてゆく傾向にある。本節では、まず根源的な他者である異性の本質的な神秘性と、それを感じ取る側の感受性が、バーキンが説く「星の均衡」に寄与していることを示したい。

アーシュラとバーキンは物語の比較的早い段階から、互いに他者の神秘的な本質を見出しており、作品は種々の神話的シンボルによってその兆しを示す。まずはバーキンがアーシュラに対してどのような神秘性を見出しているか探りたい。バーキンが初めてアーシュラを恋愛の対象として強く意識しているのは、有名な默劇の場面であると思われる。ブレグドルビーの主であるハーマイオニーは、関係が冷え切っている恋人バーキンを再び所有するために、ルツ記の「落ち穂拾いの訓話」を題材としたロシアンパレエ風の默劇を企画するが、この劇にはキャラクターの人格や人間関係にまつわる微妙かつ象徴的な示唆が充満している。アーシュラは劇中で、夫や息子に先立たれて苦悩するナオミを演じていたが、バーキンは“Ursula's brilliant frustration”と“dangerous helplessness”に我知らず心惹かれ、アーシュラの姿に自身の「未来」を見出す(92、以下下線部は全て引用者)。アーシュラの演技から滲み出て

いた「フラストレーション」と「無力さ」が意味するところのものは、バーキンが彼女と恋愛観をめぐる口論をした後、彼女の過去の話（家族のことや恋愛遍歴など）を聞く場面において示唆される。彼女の初恋の相手スクレブンスキーの話聞いたバーキンは“*We all suffered so much*”と彼女の苦悩に共感を示すのであるが(153)、スクレブンスキーはジェラルドと同様、自ら進んで工業化社会の歯車になり、アーシュラの深い幻滅を招来した人物である。したがってより具体的には、有機的な愛や生の営みが阻害されるような受難について、バーキンは共感しているのだと推測される。そこから二人は理不尽な受難に対する反発から意気投合するのだが、バーキンは彼女の「危うい破壊の向こう見ずさ」、何もかも「打ち棄ててしまえる」という態度に恐れつつも魅せられる(154)。このとき彼女の目は「金色の光を宿し」(154)、バーキンは今後幾度となく彼女の「金色の光」を渴望することになるのだが、この光はさらに作品冒頭の、アーシュラの謎めいた描写と呼応している。

Ursula [always had] that strange brightness of an essential flame that is caught, meshed, contravened.... Her active living was suspended, but underneath, in the darkness, something was coming to pass. If only she could break through the last integuments! She seemed to try and put her hands out, like an infant in the womb, and she could not, not yet. Still she had a strange prescience, an intimation of something yet to come. (9)

この箇所（アーシュラとグドルーンが結婚と夫婦生活に対する不信感を露わにする場面）における文脈で、アーシュラの「本質的な光」を抑圧しているのは、父権制社会の未婚女性に対する圧力といえる。アーシュラは抑圧を受けながらも、ある種の確信を持って、その次元からの解放を待ち受ける人物として描かれているのである。バーキンは、有機的な生を生きることを阻まれるアーシュラの受難に共感すると同時に、彼女の内に潜在する破壊的なまでの推進力に、不安の混じった憧憬を感じている。そうした受難と抵抗の女性像が、彼女の憤激のエネルギーが、アーシュラの「金色の光」となって溢れ、(時には反抗の対象がバーキン自身の場合でさえ)彼を魅了するのである。

一方、アーシュラは教室の場面で、バーキンの瘦身に隠された「生命そのものの力強い美」、「豊かさ」と自由さを感じ取っている(44)。彼女はバーキンの「堅苦しい」「救世主じみた」重々しい雰囲気や軽蔑する一方で、同時に彼



の「生命の敏捷さ」に惹かれている(129-30)。このようなバーキンの「二面性」に対するアーシュラの嫌悪は、「力強い甘美な火」のように彼女の顔に顕れ、バーキンを強く惹きつける(129-30)。第二十三章「遠足」において、バーキンの“spirituality”に対する固執やその欺瞞について、彼らは最後の激しい口論を繰り広げる。やがて和解した二人は「記念すべき戦場」を後にし、何か「超然とした」、「新しい覚醒」の境地に至る(311)。二人は愛の言葉を交わし、アーシュラはあたかも「魔力をかけられたかのように、奇妙にバーキンの方へ引き寄せられる」(313)。

Unconsciously, with her sensitive finger-tips, [Ursula] was tracing the back of [Birkin's] thighs, following some mysterious life-flow there.... It was the strange mystery of his life-motion, there, at the back of the thighs, down the flanks. (313)

「電流のような情熱の暗い奔流」を引き出した彼女は、「新しい回路、情念の電気エネルギーの流れ」を完成させる(313-14)。アーシュラはバーキンの「神秘的な生命の流れ」を探り当て、誘い出すことができる女性なのである。バーキンという人格の本質は、ある種の生命力の奔流を、一見静かでスピリチュアルな相貌の下に秘めている点にある。そしてアーシュラは、その破壊的なまでの直情的な推進力で、彼の欲望（より昇華された表現でいえば、生命力の奔流）を解き放つことができるのである。

これに続くアーシュラとバーキンの性愛描写はそれぞれの神秘的な他者性を反映し、横溢する神秘的な象徴は互いの互いに対する崇敬の念を物語っているといえる。

• She had thought there was no source deeper than the phallic source. And now, behold...from the strange marvellous flanks and thighs, deeper, further in mystery than the phallic source, came the floods of ineffable darkness and ineffable riches. (314)

• She would have to touch him. To speak, to see, was nothing.... Darkness and silence must fall perfectly on her, then she could know mystically, in unrevealed touch. (319)

これらの箇所では特徴的なのは、視覚を排し触覚による表現が多用されている点と、アーシュラの視点から男根崇拜的な観念を超越しようとするようなセクシャリティが提示されている点である。視覚の排除は、低次元な性的結び

つきをもたらずものとして、視覚的魅力を超越しようとした“*I want a woman I don't see*”というバーキンの台詞に対応している(147)。また男根崇拜的セクシャリティの超越は、バーキンが忌避する因習的な性愛のあり方を超越することに、直結していると考えられる。本作では、生殖や「家庭本能」を旨とした性愛が女性側の所有欲に陥りやすいことへの危惧が繰り返し語られている(352)。これに対し、「遠足」で示される超ファロスのなセクシュアリティは、生殖というシステムを基盤とした、旧来のセクシュアリティからの決別を表明しているのである。この場面におけるバーキンは「神の息子」であり、アーシュラは「人間の娘」とされているが(313)、「神の子」とはアーシュラが『虹』においてその出会いに憧れた、人間性を超越した存在であった(*The Rainbow* 256)。彼女はさらに“*a paradisaal flower she was, beyond womanhood*”と表現されており、「女性性」を超越し、『恋する女たち』においては新生への約束の象徴でもある「花」に譬えられている(313)。バーキンは「非人称」の領域における(146)、いわゆる「星の均衡」を保った結合を希求していたが、これら一連の象徴——金色の光、神の息子、花など——は「人間性の超越」という理想を具現化するものである。二つの個が「非人称」の領域において互いの自由を形作りながら永久に結合するという、「星の均衡」の理念には、所有欲に陥りがちな旧来のセクシャリティはそぐわない。この場面における「触知できる他者性」のセクシャリティは、非人称的な次元にまで昇華された“*the pure duality of polarisation*”(201)を構築するために、旧来の「男性性」、「女性性」といった構図を払拭し、より神秘的な他者性を醸成する表現なのである。

男根崇拜的な性のあり方を超越し、視覚ではなく触覚によって、神秘的な「他者」の輪郭を確かめる。このような性のあり方は、個を保ったままの永久的結合という「星の均衡」の哲学に裏打ちされるものだが、それは以下に見るように、ジェラルドとグドルーンの官能描写と対比することによって、より明らかになってくる。

### 3. 母子的な相互依存と個の抹殺——ジェラルドとグドルーン

父親の空虚な死相を目の当たりにしたジェラルドは、日増しに自分自身の空虚な生に対する恐怖を強めていき、その恐怖に耐えられなくなったため、

ある晩グドルーンの寝室へ忍びこむ。グドルーンはジェラルドの欲望を受け入れるが、この場面におけるジェラルドのグドルーンに対する欲情は以下に見られるように、極めて暴力的なものである。

[Gerald] found in [Gudrun] an infinite relief. Into her he poured all his pent-up darkness and corrosive death, and he was whole again.... She had no power at this crisis to resist. The terrible frictional violence of death filled her, and she received it in an ecstasy of subjection, in throes of acute, violent sensation (344)

ここで示されているような、ジェラルドとグドルーンの間を生じる欲情の突発的な迸りは、サディスティック・マゾヒスティックな支配／服従を通じた相互依存の力学に特徴づけられる。二人がまだ親密な関係を結ぶ前の段階であるが、ジェラルドは炭鉱列車を恐れて逃げ出そうとする牝馬を拍車で痛めつけて抑圧し、それを目撃したグドルーンは「心臓を貫くかのように思われる痛烈な眩暈」を覚え、恍惚とする(111)。この状況は「湖上のパーティー」の章において、グドルーンがジェラルドの所有する高原牛(牝牛)の群れを魔術的な舞踊をもって威嚇する場面と対応させられている。我が身を危険にさらしたと叱責するジェラルドに対し、グドルーンは「わたしがあんと、あんたの家畜を恐れるとでも思ってるんでしょう？」と嘲弄し、彼の顔を手の甲で打つ(170)。動物に対する抑圧は、これらの状況では異性に対する抑圧／屈服の欲望を暗示しているのである。このような意味が二人の間で疑いようもなく諒解されるのが、狂猛なウサギのピスマルクをジェラルドが捕獲する場面である。「秘伝を授けられた」二人の間には「同盟」、「冥府のような認知」が感ぜられ、「忌まわしい神秘に、互いに連座させられ」る(242-43)。ジェラルドとグドルーンは共に腕に裂傷を負うのだが、彼女の傷はジェラルドにはあたかも「彼自身の脳を横切って切り開かれた」かのように感ぜられ、その傷口から“the unconscious...ether of the obscene beyond”が現れる(242)。この「猥褻な異界」とは恐らくジェラルド自身の抑圧された欲望を、すなわちここではサディスティック／マゾヒスティックな官能性の領域を指すと考えられる。グドルーンはジェラルドの潜在的なサディズム／マゾヒズムを引き出し、本人に自覚させてしまう女性なのである。

ジェラルドとグドルーンの間に取り交わされるサディズム・マゾヒズムは、自己の存在を自力で完成させられない人間が、他者の存在に強く依存してし

まう心理から生じてくるものと解釈される。

サド・マゾの倒錯の世界では、自他の間にある侵すべからざる壁を破壊し、神秘である他者を力でもって自己の領域に引き入れようとする、あるいは、自己と融合させようとするからである。それは、自由で独立した一個の人間に不可欠な魂の中核、内面的中心、自己が欠如しているために、外の何かによって自分を支える必要があるからである。つまり、自分の無力のために、支配あるいは服従という形で他者に依存しなければならないのである。(鎌田 98)

鎌田によれば、ジェラルドの活力源は「父トマス・クライチの生き方に対する反動」であった(99)。クライチ氏は自身が大事業主でありながら、炭鉱夫たちに対しては常に慈父のような存在でありたいと願い、その矛盾に葛藤し続ける。ジェラルドの母クリスティアーナは、夫のこうした姿勢に敵意を煽らせていたが、トマスは彼女を憐れみの名のもとに抑圧することで自身の優越性を保っていた。このように家長でもあり事業主でもあるトマスは、慈善や憐れみといった優越的な感情に依存することによって、荒涼たる家庭生活、霊魂的生活の空虚さから目を逸らしていたのだが、こうした性向は一見父の経営方針に反抗的だった長男ジェラルドにも受け継がれていた。ジェラルドは衰弱し、息子に依存するようになってきた老父に対する憐憫を禁じ得ず、「慈愛に対する反動の中にありながらも、それに支配されて」いる(219)。周囲の人間に対して何かと抑圧的であり、しばしば庇護者の役割を買って出るジェラルドは、父と「本質的に同種の人間なのである」(鎌田、102)。したがって、敵意の対象でありつつも自身の鏡像である父が空虚な生を送っており、それ故に空虚な死を遂げるのを目の当たりにしたジェラルドは、同様の「底無し」の「虚無」が自身の内面にも生じていることに恐怖するのである(337)。

この「虚無」を埋めるための方法を、ジェラルドは何かを支配すること以外には知らない。事業主である彼にとって仕事は支配することであり、男性としても彼は女性(プッサムなど)に屈服を強いる傾向がある。「虚無」を満たすことと、男性性の回復とは、ジェラルドの中では密接に結びつく行為だといえる。

He was a man again, strong and rounded .... And she, she was the great bath of life, he worshipped her. Mother and substance of all life she was.

And he, child and man, received of her and was made whole.... [T]he miraculous, soft effluence of her breast suffused over him...like a soft, soothing flow of life itself, perfect as if he were bathed in the womb again.

(344)

以前の引用部においてジェラルドが彼女の中に流し込むのが「死」であったことは (“Into her he poured all his pent-up darkness and corrosive death...”)、ここでグドルーンが単なる「子宮」に還元されていることと無関係ではない。それによって彼はグドルーンという人格の「個」を抹殺しているからである。ロレンスは（男性から見た）女性の神秘的な感応力をしばしば「子宮」の機能に帰結させるが、『恋する女たち』においても次のように、バーキンとアーシュラが“Excuse”において理想的な合一を果たす場面で「子宮」の比喩が用いられている。“They drifted through the wild, late afternoon, in a beautiful motion that was smiling and transcendent. His mind was sweetly at ease, the life flowed through him as from some new fountain, he was as if born out of the cramp of a womb” (311). ここではアーシュラとバーキンの両者が、「子宮の窮屈さから生まれ出た」という文言に象徴される、新生の喜びを嘯みしめている。この「創造的神秘」の境地は、一組のカップルが葛藤の末にたどり着いた、いわば共同作業なのである。これに対して先ほどの引用部では、ジェラルドのみが子宮に回帰し、グドルーンの胎内で一方的に自己完結する構図になっている。ここで見られるジェラルドのグドルーンに対する「崇拜」とは、複雑かつ繊細な人格を具えたグドルーンという女性を、母性／癒し手としての機能の一点のみにおいて神聖視する態度なのである。彼はこの性交渉によって自らの男性性と生命力を回復するが、それゆえにグドルーンに対する依存が高まってくる (He was afraid she would deny him before it was finished. Like a child at the breast, he cleaved intensely to her, and she could not put him away. [345]). 正にバーキンが批判していた、男性が女性の母性的な側面に依存するような状態に、ジェラルドは陥っているのである。

ジェラルドが安らかな眠りにつく一方、グドルーンは凶暴なまでの覚醒状態におかれる。これは彼女が一方的に欲望の対象とされたことによって、ジェラルドとの一体感を覚えることが出来ず、彼が成し遂げた「自己の回復」から疎外されているためと推測できる。強迫観念による依存からカップルの均衡が崩れ、それが交際の破綻につながっていく状況を、ジェラルドの暴力

的な性の描写は予示しているといえる。

ここで二組のカップルの関係性について、その要素を整理する。成功例であるバーキンとアーシュラは、「星の均衡」の中に互いの個と自由を保った結合を成し遂げ、互いに「触知できる他者性」を感じることを通じて生命の神秘を見出すことができる。それと対比されているジェラルドとグドルーンは、破壊的な浸透を伴う官能体験を持つが、一方が他方を無個性化し、征服する行為の中で母子関係のような相互依存に陥ってしまい、それが結合の挫折へと、ひいては男の破滅へと繋がっていくのである。

#### 4. 男同士の「星の均衡」——ジェラルドとバーキン

本稿の狙いは冒頭で述べたように、バーキンとジェラルドの同性間の絆が、二組のカップルの恋愛関係における対比を補強する、「第三の対比項」になり得ることを例証する、という試みである。まず、男同士の絆に関するバーキンの思想が最も明らかに言語化されている箇所を確認したい。第十五章においてアーシュラとの結婚を決めたバーキンに対し、ジェラルドは自分もグドルーンとの結婚を考えていると打ち明けるが、いざとなると躊躇している様子である。「ある一つの方向に行くか、それとも他の方向に行くか、そのわかれめの第一歩を踏み出さなきゃならんところへ来ている。そして、結婚というのがその一つの方向なんだ——」というジェラルドであるが、彼には「他の方向」が分からないため、やはり結婚が「最後の手段」と思えてくる(351)。そこでバーキンは恋愛から結婚や、家庭生活といった観念を棄てるように忠告し、次のように持論を展開する。“You’ve got to take down the love-and-marriage ideal from its pedestal. We want something broader. — I believe in the *additional* perfect relationship between man and man— additional to marriage” (352、斜体は原文)。バーキンによれば、この「付随的な関係」は異性愛と必ずしも同じではないが、“equally important, equally creative, equally sacred”であり、ジェラルドがこれを認めることができれば、男女を問わず皆が“a greater freedom”、“a greater power of individuality”を得ることができるという(352)。西田は、ここでバーキンが意図したものを、「男女間の結びつきのような意味での支配関係の恐れがなく、ただ自を本当の自たらしめる真の他の存在という協力関係のみ」に基づく、「男同士の純粋な生命的結びつき」であると説明

している(194)。先にも述べた通り、バーキンは卑俗な所有欲に陥りがちな、旧来の性愛のあり方を批判していた。結婚を不可避の運命として捉えるジェラルドの固定観念は、彼が有機的な生を生きることを不可能にする。語り手によれば、もし彼がバーキンの申し出を受け、「純粋な信頼と愛の絆」をバーキンとの間に築いていけば、「それに従って、女性とも」同様に純粋な関係を結ぶことができたであろう(353)。ここから分かるように、バーキンにとって男同士の結合は異性愛の結合と同等のものである。しかもそれはジェラルドをして空虚な生の陥穽から脱出させ、バーキン流の有機的な生に向かって改宗させる役割を期待されていたのである。

ロレンスが男同士の絆を異性の恋愛と対等の地位に引き上げており、なおかつそこに主人公の一人を悲劇的結末から救う希望が託されていたことに注目すると、この友愛を二組の異性愛関係と同じ基準に照らして比較検討することが重要になってくる。ジェラルドがバーキンの申し出を退けたことは、彼の運命の大きな分岐点とされているためである。従って『恋する女たち』を、無慈悲な崩壊の過程からの救済を求める人類の物語として読むとき、ジェラルドの空虚な死をグドルーンとの危険な性愛関係によってのみ解釈することは、同性間の絆の意味を過小評価することにつながる。男同士の絆は結果的に挫折してしまうのだが、その原因は後述するようにジェラルドの側が因習的な観念を手放せなかったことにあった。このような男性同士の結合の不完全性に着目することは、バーキンが理想的な結合を築くことができたアーシュラの特異性を、より鮮明に浮かび上がらせる。

以下では、ジェラルドとバーキンの関係性について、その特性を大まかに押さえ、それが問題となる格闘の場面とどう関連づけられるか検討する。バーキンとジェラルドの間には、作品冒頭から一種の愛憎が生じているが、この親密さはジェラルドの側の根源的な空白に起因する。これまで見てきたように、即物的な、ある種呪われた人物であるジェラルドにとって、バーキンはとらえどころのない夢想家である。彼は予言者じみたバーキンの態度を侮蔑したり不信を抱いたりするが、やはり「充実した生」のヒントをバーキンに求め続ける。それでもバーキンとの交際が与えてくれる平穏は永続的なものではなく、ジェラルドは自分の観念を押し付けてくるバーキンへの不満をこぼしている(“There it was, it did not alter, and words were futilities” [232])。

『恋する女たち』が、繰り返し言語の無効性や曖昧さに自己言及する作品

である以上、この不満は重要なテーマにつながっている。つまり、男性同士の肉体的な結合は、言語や観念の限界を認め、血肉を通して「知る」ことの重要性を主張するという、本作の大きな文脈の中で捉えられる事情なのである。第16章で、バーキンがジェラルドに「男同士の愛」を永久のものとする「血の誓い」(Blutbrüderschaft)を立てようと提案する(206)。「血の誓い」とは、古のドイツの騎士団員がお互いの傷口を擦りつけ合い血を交わらせたという儀式のことだが、バーキンは自分たちも古の慣習になぞらえ(傷こそつけないものの)、「完全にして永久の」忠誠をお互いに誓おう、と申し出るのである(206-07)。この時点でジェラルドはバーキンの善良な無頓着さや、観念的なお喋りに不信感を募らせており、その申し出をやんわりと断る。これが形を変えて再び提案されるのが、第20章の“jiu-jitsu”である(268)。ジェラルドは炭鉱の仕事をし尽してしまい、グドローンとの関係が進展しているにもかかわらず、自分の人生に心からの充足を感じることが出来ずにいる。そこでバーキンは、仕事と恋愛だけでなく、闘うことでも憂さ晴らしをすることが出来るといい、柔術の手ほどきをするのである。この場面では、ジェラルドは柔術に強い関心を示し、終始活き活きとして組み合う。その後、彼はバーキンに、この柔術が「血の誓い」を意味することを確認する。バーキンが「肉体的な親睦」を深めることによって「健康的」になることの重要性を主張すると、ジェラルドは屈託なく同意する(272)。「血の誓い」の提案の時と、柔術の場面におけるジェラルドの態度の変化は、バーキンの言葉に対する不信感と関連すると思われる。バーキンとの間に純粋な霊魂的・精神的な交流を持つ瞬間が幾度もあるにもかかわらず、バーキンの「救世主的な」思想を信じていけないジェラルドにとっては、より説得力をもつ——肉体的な——関係性の表現が必要だったのである。

この場面で格闘するバーキンとジェラルドの肉体の描写は、次に見るように明確な差異をもって描き分けられている。

Birkin was more a presence than a visible object.... Whereas Gerald himself was concrete and noticeable, a piece of pure final substance....

... They were very dissimilar. Birkin was tall and narrow, his bones were very thin and fine. Gerald was much heavier and more plastic. His bones were strong and round, his limbs were rounded, all his contours



were beautifully and fully moulded. He seemed to stand with a proper, rich weight on the face of the earth, whilst Birkin seemed to have the centre of gravitation in his own middle. And Gerald had a rich, frictional kind of strength, rather mechanical, but sudden and invincible, whereas Birkin was abstract as to be almost intangible. (269)

ここで注目すべきなのは、ジェラルドが機械的な、質量と重量を持った物体であるのに対し、バーキンが物質性を超越した精妙なエネルギーであり、さらに自身の内に「重力の中心」を持っているかのように描かれていることである。自らの生の空白を埋めてくれる補完物を求めるジェラルドに対し、バーキンは「ひとりの女との永久的な結合」が唯一の「生の中心」であると答えていた。そして「遠足」においてアーシュラとの理想的結合を果たすバーキンは、自身が秘める「生命の流れ」（「電気エネルギー」に喩えられる）をアーシュラによって引き出され、これによって新生を遂げたかのように描写されていた。上に引用した柔術の場面において、超人間的な安定性を具えたバーキンがジェラルドの中に「浸透」していく描写には、バーキンがジェラルドの空白を埋め、再生させる素養を持っていることが暗示されている。しかも、彼は電気にも似た「昇華したエネルギー」を以てジェラルドの中を満たしてゆくのだが、この電気はジェラルドの活力を表現するのにもしばしば使われる表現である。創造的神秘との連帯（＝「身体の意識」）を潜在的に保持しているバーキンは、その連帯から断絶されているジェラルドにとっては神秘的な他者であり、それ故にジェラルドの目には“Almost— supernatural”なのである(272)。

この創造的神秘との連帯を駆使して、バーキンはジェラルドとともに「お互いの身体に対する理解」を深めつつ、次のように激しくもつれ合う。

• He seemed to penetrate into Gerald's more solid, more diffuse bulk, to interfuse his body through the body of the other, as if to bring it subtly into subjection.... (270)

• [T]wo essential white figures working into a tighter closer oneness of struggle, with a strange, octopus-like knotting and flashing of the limbs.... (270)

• [T]here was no head to be seen, only...the physical junction of two bodies clinched into oneness. (270)

格闘によって二人の男の間にはある種の、せめぎ合うような類の「均衡」の可能性が示唆されている。それは、バーキンがアーシュラとの間に築き上げた「星の均衡」と同様の、バーキンとジェラルドの間に生じるバランスである。ジェラルドとグドルーンの関係性は、常にどちらか一方がもう片方を抑圧するという支配構造の中で、主体が男と女の間を揺れ動いていた。それに対して男同士の柔術の場面では、バーキンの側が常に有利に立ちながらも、ジェラルドを無力化するまでには至っておらず、より互角に近い力関係となっている。「タコのような」合一体となった二人の頭が見えなくなったり交互に現れたりするのは、二人の「自我」が消滅しているように見えつつも完全には混じり合わないという点で、バーキンの理想をある程度達成しているように見える。何故ならば、「星の均衡」を保った条件下での、「肉体的／官能的／衝動的な体験による、エゴからの解放」というのが、バーキンの信奉する理念であるためだ。

こうした状況を全て踏まえると、ジェラルドにとってバーキンはある種の理想的な「他者」であり、「星の均衡」を保った交流を続ける可能性があるかのように描かれている。しかし格闘後の状況を見ると、二人の結合は成し遂げられたものの、永続的なものではなかったことが暗示されている。激しい格闘を繰り返した二人は、もつれ合った姿のまま、カーペットの上に倒れ込み、そこでジェラルドがバーキンの手を握る。バーキンはジェラルドの手を力強く握り返すのだが、ジェラルドはすぐに力を緩めてしまう。ジェラルドが先にバーキンの手を握ったという事実は、彼の方にも自分の殻を打ち破って、別の生き方をしてみたいという、潜在的な欲求があったことを暗示しているのかもしれない。しかし、この一瞬で終わってしまった握手は、ジェラルドが未だに因習的な観念に束縛されていること、二人の男に成立したかに見えた結合が利他的なものでしかなかったことを端的に示している。ジェラルドという人間の抱える「空虚さ」が、いかに根深いものであるかが、この場面に表れているのではないだろうか。ジェラルドはバーキンが申し出る「男同士の愛」という概念に、内心では「高揚を覚え」つつ、そのビジョンを信じていることが出来ない。何故ならジェラルドは、男同士の愛を「自然がその礎を与えない」関係性と考えているからである(352)。それは対等な男同士の友愛を通して、純粋な愛の経験を得る必要のあることを知りつつ、「男の中の男」

としての自意識(201)に囚われた男性の猜疑心である。

結果的に完成形態にまでは至らなかった男性同士の結合であるが、語り手はこれが成就していれば、ジェラルドが「それに従って」、「女性とも純粋な関係」、「神秘的な結婚」を果しただろう、と仄めかしていた(353)。ジェラルドがバーキンを愛するようになれば、愛することを通じて創造的神秘との連帯を得られたかもしれない。男同士の愛を不自然なものとして退けていたジェラルドがバーキンへの愛を認めるということは、それ自体が因習的な観念(男同士の愛を不自然なものに見なすような)の超越と、自身が真に欲するもの(他者との純粋かつ有機的な絆)を率直に認める悟性を必要とする。そして、そのような悟性は、創造的神秘との連帯を前提としているからである。このような悟性を獲得したジェラルドは、自分がグドルーンとの結婚を真実求めているのか、恐らく自身で見極めることが出来るようになっただろう。そうなれば自ずと、社会的な結婚という袋小路ではなく、「もう一つの途」である、他者との有機的で純粋な結合という“a greater freedom,” “a greater power of individuality”の境地に到達できたはずである。このような見地に立つと、バーキンのいう「もう一つの途」が、直接的には男同士の友愛を指すものの、その背後に性差を超越した「他者との神秘的な結合」という広がりを持っていることが確認される。

ジェラルドの遺体と対面した後、彼が凍死した場所を見に行ったバーキンは、真の充足は自身の生命を「永遠の創造的神秘」に直接結びつけることによって得られるのだと悟る(478-79)。こうした「創造的神秘」との一体感を鋭敏に感じ取ることができるのが、バーキン自身とアーシュラである。グドルーンが不毛・腐敗の極致を体現するレルケと交流を深めていく一方、雪山の凍てつくような不毛さに圧迫感を覚えたアーシュラは、突如、「豊穡」(“fecundity”)の世界に魅了され、バーキンを伴って雪山を脱出するのである(434)。アーシュラはこのような自然に対する鋭敏な感応力と、新生に向かう激しい推進力とを具えた人物であった。『恋する女たち』の結末は、個人の有機的な生に対する明確な方向性と、自由でひたむきな信念が、腐敗と崩壊の時代における「新生」のために必要不可欠であることを示唆するものである。

## 5. 結論

本稿は、『恋する女たち』におけるバーキンとジェラルドの「男同士の愛」

を友愛と位置づけ、柔術の格闘シーンは言語や観念の不完全性を補うための、身体的接触を伴うコミュニケーションであると結論付けた。人類が直面する墮落と崩壊の運命を逃れるためには「創造的神秘」との連関を持つことが必要である、というのがバーキンの至った結論であるが、そうした連関を得るためには異性との有機的な結合を成し遂げなければならない。そのための二つの条件——官能的な経験を通じた既存のエゴからの解放、および男女それぞれが個の尊厳を保ったまま合一するという「星の均衡」——について、アーシュラとバーキンは数多くの葛藤を経て両方の試練を突破するが、ジェラルドとグドルーンが到達できたのは前者の官能的体験だけであった。それは内面の虚無を恐れたジェラルドがグドルーンに依存するあまり、彼女の本質的な「他者性」を尊重できず、「星の均衡」を維持できなかつたためである。このような二項対立の構造に第三の関係、つまり男性同士の愛が並置されており、それは異性愛と対等であるだけでなく、ジェラルドを空虚な生から解放するものとされていた。男性同士の愛の存在を信じることは、それ自身が固定観念の放棄を必要とし、彼が真に欲している絆——他者との純粋な結合——に対する自覚を促す可能性があったからである。柔術の場面では、「創造的神秘」との連関を秘めていたバーキンの、ジェラルドにとって「神秘的な他者」であることが暗示され、二人が友情において「星の均衡」を保った合一を成し遂げる可能性のあることが示唆されている。しかしジェラルドはバーキンのいう「男同士の愛」に対し、その愛に目覚めかけていたにもかかわらず、因習的な観念や自意識に囚われて合一を永久的なものにすることが出来なかつた。『恋する女たち』は、このような現代人の観念の空虚さを描き出す一方、有機的な生に対する鋭敏な感受性とひたむきな信念に、救済の道を見出すのである。

## 参考文献

- Craft, Christopher. "No Private Parts." *Another Kind of Love: Male Homosexual Desire in English Discourse, 1850-1920*, U of California P, 1994, pp. 141-91.
- Doherty, Gerald. "Ars Erotica or Scientia Sexualis?: Narrative Vicissitudes in D. H. Lawrence's *Women in Love*." Ellis, *Casebook*, pp. 135-58.
- Ellis, David. "Introduction." Ellis, *Casebook*, pp. 3-24.
- , editor. *D. H. Lawrence's Women in Love: A Casebook*. Oxford UP, 2006.
- Kaplan, Carola M. "Totem, Taboo, and Blutbrüderschaft in D. H. Lawrence's *Women in Love*." Ellis, *Casebook*, pp. 183-204.
- Lawrence, D. H. "The Prussian Officer." 1983. *The Prussian Officer and Other Stories*, edited by John Worthen, Cambridge UP, 1983, pp. 1-21.
- . *The Rainbow*. 1915. Penguin Books, 2007.
- . *Women in Love*. 1920. Penguin Books, 2007.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist*. Chatto & Windus Ltd, 1962.
- Murry, John Middleton. *Son of Woman: the Story of D. H. Lawrence*. Reissued ed., Kraus Reprint, 1980.
- Oates, Joyce Carol. "Lawrence's *Götterdämmerung*: The Tragic Vision of *Women in Love*." Ellis, *Casebook*, pp. 25-50.
- Sedgwick, Eve K. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985.
- Stevens, Hugh. "Sex and the Nation: 'The Prussian Officer' and *Women in Love*." *The Cambridge Companion to D. H. Lawrence*, edited by Anne Fernihough, Cambridge UP, 2001, pp. 49-66
- 今泉晴子. 「『恋する女たち』における死の意味——ジェラルドの場合」. ロレンス研究会, pp. 89-118.
- 岡田桂. 「世紀末イギリスの柔術ブーム——社会ダーウィニズム、身体文化メディアの隆盛と帝國的な身体」. 『ヴィクトリア朝文化の諸相』, 英米文化学会監修, 彩流社, 2014, pp. 185-208.
- 岡野圭壺. 「『恋する女たち』における衣裳性——上流階級とボヘミアンの場合」. ロレンス研究会, pp. 199-232.
- 鎌田明子. 「崩壊の河」に棲むグドラン」. ロレンス研究会, pp. 119-52.

- 北崎契縁. 「バーキンとアーシュラの合一と対立——「楽園」と「墮天使」」. ロレンス研究会, pp. 153-76.
- 黒瀬勝利. 「「血の盟約」と「ウルニング」——『恋する女たち』におけるドイツ同性愛者解放運動」. 『D. H. ロレンス研究』, 第 13 号, 日本ロレンス協会, 2003 年, pp. 34-47. *J-stage*,  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/dhlawrencestudies1991/2003/13/2003\\_13\\_34/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/dhlawrencestudies1991/2003/13/2003_13_34/_article/-char/ja/).
- 染谷昌弘. 「『恋する女たち』における「創造的生」の可能性」. 『日本英語英文学』, 第 22 号, 日本英語英文学会, 2012 年, pp. 19-33.
- 西田稔. 「『恋する女たち』における男性間の結合の意味」. ロレンス研究会, pp. 177-98.
- 橋本宏. 『D. H. ロレンス研究——その生涯と作品』. 鳳書房, 2000 年.
- 藤原満寿子. 「『恋する女たち』の構造的シンボル——月とアルテミス」. ロレンス研究会, pp. 11-54.
- ロレンス、D. H. 『恋する女たち』. 福田恒存訳, 新潮文庫, 1969.
- ロレンス、D. H. 「王冠」. 『トマス・ハーディ研究／王冠——D. H. ロレンス紀行・評論選集 3』, 倉持三郎訳, 南雲堂, 1987 年, pp. 253-360.
- ロレンス研究会編. 『ロレンス研究——「恋する女たち」』朝日出版社, 1979 年.